

随想

雑感：記憶と忘却

名誉教授 藤重 悟

数理解析研究所を定年退職し4年が過ぎて年金生活に入っているが、無給の特任教授として研究所(数理解析研究所別館)で現在も研究を続けられることに心より感謝している。あと2年間の科学研究費補助金の支援で、引き続き現役の時と同じような研究環境の下での研究生活と共に国内外の研究者達との研究交流を楽しんでいる。



ところで、このゴールデンウィーク中に日常と違う生活パターンであったことにも起因するのですが、まったく不覚にも、連休明けの知人の研究室来訪をすっかり忘れてしまい、知人には大変申し訳ないことをしてしまった。手帳に知人の来訪予定日時を書いていたのであるが、手帳のような補助記憶もアクセスしなければその役を果たせない。記憶と忘却のせめぎ合いである。そのような記憶と忘却について日頃思っていることの一部を気の向くままに述べたいと思う。

私は数理最適化の研究をしてきたが、補助記憶ということでは、興味ある論文を読んだらファイルに収めて棚に並べておくのが、長年の重要な作業であった。どの論文がどのファイルにあるかはカードに記入して著者名から論文の検索ができるようにしておいて、活用していた。ところが、最近では(と言っても十数年前から)、ファイルの作成をほとんど止めてしまった。学术论文の電子化や電子ジャーナルの登場と効率的な文献検索の普及により、必要な時に必要な論文に容易にアクセスすることができるようになったからである。定年退職を機に、棚いっぱいのファイルをほとんどすべて廃棄したが、現在の研究に全く影響していない。これも、私が京都大学図書館の電子ライブラリを利用できるからであり、有り難く思っている。手元のファイルは廃棄したが、

このような学術文献データの大部分は出版社によって支えられており、企業経営の状況変化によっては文献データベースの維持が危うくなって、補助記憶媒体としての機能が保たれなくなるのではないかと、という心配がある。著作権の問題もあるが、人類の知の蓄積と世代を繋ぐ知の連鎖を断ち切らないために、堅牢で安定した情報保持と公開のメカニズム(装置)が望まれる。

人間にとっては、記憶も忘却もそれぞれが功罪の両面を持っている。すべてを記憶する人物が登場するテレビドラマもあったが、多少の忘却は人類の安定した持続のために良いことである。しかし、歴史的負の遺産の記憶は、国際紛争の火種となり、今も世界の至る所で緊張関係を生じさせている。負の遺産は忘却したいという誘惑に襲われるのであろうが、これらの緊張関係において相互に相手側の気持ちを理解する上で、負の遺産の記憶を‘適切に’保持することは重要であり、その相互理解の上に共存関係を築くことができる。また、有形、無形の伝統文化や芸術は記憶の連鎖の上に存続する。そのために、ITのデジタル技術を始め色々な補助記憶「装置」が重要である。

人間関係についても、例えば、家族愛は記憶の共有によって維持され高められる。思い出や懐かしさは、記憶の上に存在する。認知症による認識力と記憶の消失は、双方向の家族愛の態様を一変させてしまう。一研究者としても、認知症(記憶障害)は脅威であるが、そうならない限りいつまでも研究を続けたいと思っている。私の研究分野で90歳を過ぎてもしゃきっとして国際会議で講演を続けている著名な研究者がおられるのは、心強い。私もそうありたいと思いながら定年退職後の研究生活を楽しんでいる。この年になると、同時並列的な仕事の処理は難しくなるし、補助記憶媒体の使用が有効である。こういう言い方をすると語弊があるが、若い人たちとの共同研究も、ある側面では、有能な補助記憶の活用なのかも知れない。

(ふじしげ さとる 平成24年退職 元数理解析研究所教授 専門は数理最適化)